



Title	初めて相浦先生にお会いした頃
Author(s)	青野, 繁治
Citation	大阪外国語大学アジア学論叢. 1991, 1, p. 181-182
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99644
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

追悼の辞

初めて相浦先生にお会いした頃

青野繁治

私が初めて相浦先生にお会いしたのは、先生が二年間の香港滞在を終えて帰られた時なので、1976年の10月はじめであったと思う。ちょうど9月に毛沢東が死去し、10月に入って「四人組」の失脚のニュースが伝えられた頃である。

私は大学に遅れて入学したので、当時はまだ中国語学科の2年生であった。中国語講読の授業の一つは、4月から繆という香港大学の教授の担当であったが、9月まで香港に帰られ、代わって帰国された相浦先生が担当することになっていた。テキストは魯迅の『彷徨』、繆先生は第一編「祝福」を講義された。内容を中国語で詳しく説明されたあと、その内容に関して中国語で簡単な質問をして、学生に中国語で答えさせる、という授業形態であった。学生としては、プレッシャーの少ない楽な授業であったと記憶している。相浦先生は、第二編「在酒楼上」を読むことになっていた。

私達は教室で予習をしながら、どのような先生が現れるかと、期待して待っていた。相浦先生は風のように教室に入り、厚さで汗びっしょりになった額と首をハンケチで拭いておられた。白い開襟シャツの印象が強く残っている。それからうつむきかげんに自己紹介をされ、今日は授業をしないで、香港の土産話をする、と、宣言された。学生の歓声が静まるのを待って、先生は香港大学で知り合った人々（古代漢語で上手に会話をするイギリス人の中国文学研究者など）、体験した事件、食べた料理のことなどを話されたように思う。

私はその後も色々な場面で、香港でのことをうかがっているので、今ではもはやどの話をどの時にお聞きしたのかわからなくなってしまった。それでもよく覚えているのは、76年の天安門事件後、大陸から香港に逃亡してくる人が増えた。それも泳いで来る。あそここの海峡にはフカがいるんだけど、それでも泳いでくる。だからよく下半身のない死体がよく流れ着いたニュースを耳にした。ただそれは単に大陸の政治に追い詰められてくるのではないらしい。海の向こうからこちら

の香港を見ていると、夜は電気がついてキラキラ華やかだから、それに魅かれてやってくるのもいるらしい、という話で、いかにもとぼけたこのようなお話をするのが、先生は得意だった。

先生の講読の授業は、2年生には少し難しい魯迅の小説がテキストであったせいもあるだろうが、学生のできも悪く、なかなか進まなかった。結局半年で「在酒楼上」一編を読み終えただけだった。講読の授業なので学生を指名して読んで訳させるのだが、先生は粘り強く、もたもたしている学生の訳文を最後まで聞かれ、次に何故そういう解釈になるのかを質問して、それはこれこれこのところで間違っているのだと丁寧に間違いの原因を指摘された。そして一通り解釈についての共通の認識を確立しておいてから、次にもう一度最初から、一字一句の意味のあらゆる可能性をなぞり、文の構造から、意味を確定して行かれるのである。講読の授業は読んで訳せればいいと思っていた私は、授業ではそのような緻密な読み方をしなければならないのだ、訳せたとしてもそれは本当に分かったことはならないのだ、ということを初めて知った。

私は既にその頃から卒論のテーマを太平天国にすると決めていたところがあって、3年生になると、歴史ゼミ（林要三先生）をとったが、文学ゼミや文学史など相浦先生が担当される授業を全部履修していたのは、2年の時の印象が強かったからに違いない。

私は高校生までは、授業中に疑問が生じても、積極的に質問をするようなタイプの子供ではなかった。しかし相浦先生にだけは、不思議と授業のあとよく質問をしに行った。当時は学生が語科会というのを組織していて、私もその執行委員だったので、外大祭や新歓などのイベントがあるとよく講演をお願いに行ったりもしたから、先生の方も私をよく覚えていて下さった。結局卒論は「太平天国」関係で書いたので、相浦先生は卒論の指導教官ではなかったのだが、大学院を受けるときに、文学に転向したい旨を相談すると快く指導を引き受けて下さったのも、そういう経過があったからではないかと思う。

今から思えば1976年10月は、中国という国だけでなく、相浦先生にお会いしたことで、私というちっぽけな人間にとっても大きな転機となったのである。